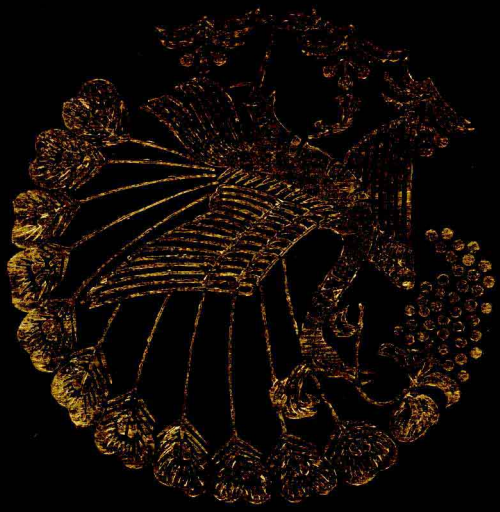


增補改訂

# 日本文學大辭典

## 第四卷

文學博士
藤村作編

新潮社版

昭和二十五年十月三十日　發行
昭和二十七年七月十五日　三刷

定價　金九百五拾圓
地方賣價　千　圓

著作權所有

增補改訂
日本文學大辭典
第四卷

編纂者　藤村作

發行者　東京都新宿區矢來町七十一番地　佐藤義夫

發行所　東京都新宿區矢來町七十一番地　株式會社　新潮社
電話九段(33)一一番　二一番　三一番　四一番　五一番
振替(東京)八〇八番

印刷所　東京都文京區西江戸川町二十一番地　二光印刷株式會社
印刷者　佐藤精亮

# 挿畫目次


浮瑠璃正本（日本大王、生玉北向八幡宮、以呂波物語、日本王代記、男色加茂侍、三輪丹前能、ゆり若大臣、日本逢萊山）……八二
常用漢字表……八八
書籍目錄（一）……一一〇
書籍目錄（二）……一一〇
書道（一）（聖武天皇宸翰雜集、空海自筆書狀、伊都子內親王御願文）……一一三
書道（二）（小野道風土代、藤原佐理自筆消息、藤原行成自筆白氏文集、藤原忠通自筆書狀）……一一三
書道（三）（伏見天皇宸翰、後柏原天皇宸翰、近衛信尹自筆日記）……一一三
書道（四）（松花堂昭乘自筆書狀、本阿彌光悅自筆和歌卷物、細井廣澤自筆七律詩稿、貫名海屋自筆四言古詩）……一一三
新古今和歌集古寫本（一）（隱岐本、前田家本、親長本及び同奥書）……一五〇
新古今和歌集古寫本（二）（親行本及び同奥書）……一五〇
神代文字（一）（日文、同草體）……一九二
神代文字（二）（日文縱體、天名地鎭、秀眞）……一九二
新聞（一）（新聞類似物、幕末の飜譯新聞、維新紛亂期の新聞）……二一〇
新聞（二）（明治初期の日刊新聞）……二一〇
前句附及雜俳（高天鶯、鳥おどし、俳諧寄相撲、俳諧曲太鼓、津ばめ口、雜俳獨物）……三四六
川柳（暦、擂鉢、句合、柳樽初篇、繪本柳樽、柳の栞）……三四六
藏書印（北條實時、板坂卜齋、傳德川家康、僧天海、林崎文庫、屋代弘賢、狩谷棭齋、柳亭種彥）……三六二
裝飾經（一）（平家納經序品及び授記品）……三六四
裝飾經（二）（久能寺經、扇面寫經、法華經册子）……三六四
曾我物語（一）（妙本寺本、大石寺本）……三七六
曾我物語（二）（古本曾我物語、木活字本曾我物語、正保板曾我物語）……三七六
太平記（一）（神田本、實德本、義輝本）……四三二
太平記（二）（慶長活字本、元和活字本、吉利支丹版目錄、參考太平記）……四三二

増補改訂 日本文學大辭典 第四卷

# し（つゞき）

**修驗道**（しゅげんだう） 宗教 【名義】修驗の意義は、或は修持得驗とせられ、又は實行を修して法の成るを驗するとせられる。嶮岨を跋渉して苦修練行し、よつて以て靈驗を得るをいふのである。また呪法を修持する所から呪驗ともいはれ、山野に練行する所から山伏ともいはれた。佛教一般と異る道を取り、俗形にして實行を第一義とするために、自らは顯密二道に並んで修驗道を立て、これ等三道の鼎の如く相輔くべきを主張してゐる。【解說】天保十二年に、寺社奉行阿部伊勢守が、宗旨名義以下十二條を質問したに對して、本山方・當山方の各々より提出した修驗十二箇條なるものがあつて、簡潔に修驗道の如何なるものかを示してゐる。平安朝、役氏三十八世の蓮覺が、彦山先德の口傳を筆錄したものに、「修驗修要祕決集」三卷あつて、この實行宗のすべてに亙つて、深遠な教義を加へてゐる。その子孫たる大永年間の即傳が傳へて、能くまとめたものである。この即傳に、「三峰相承法則密記」二卷があつて、峰中の法則百三十六條を叙してゐる。彦山は天台系に屬するものであるが、併し教義・教風の大綱に至つては、兩派別に異る所がない。「祕決」の中に、「夫山伏者即身即佛體性、毗盧覺皇極位也」といひて、この肉身の儘にて大日法身を證得し、凡形を改めずして胎藏八葉の中臺にのぼるべきを提唱してゐる。即身について修驗道の意にては三種を分つとて、即身成佛（始覺）、即身即佛（本覺）、即身即身（始本不二）の三階を立て、前二者は「顯教の始本偏理の所談にて、生佛對辨の義に同じ。即身即身こそは、修驗道不共の極理であつて、このまゝが無作三身の直體、無相三密の妙用なり」と言つてゐる。その俗形を法とするはこれがためで、峰入りの終極たる柱源灌頂を說明して、當山十二箇條の中に、「自身常用の五器あかつきを壇板にならべ、是を佛具壇具と稱し、專ら當相即道とて、人間常在の器類道具につきて直ちに實相を示し、有りのまゝなる當相に甚深の理趣をさとすこと、峰受正宗の本意なり」と言つてある所に、その教義と教義の活用とが見られる。その本尊とする所は、教義より推して行く時は、或は峰中の三個の本尊とて、(一)峰本尊、(二)宿本尊、(三)床本尊、即ち眼前の事物をすべて本尊とし、又は有相・無相の二種を立て、中に於て無相の本尊即ち自身即佛とするのであるが、併し實際上に於ては、不動明王を通途の本尊とする。不動明王は、大日如來の敎令輪としての相に外ならぬのである。その經典は、特にこれと一定したものが無いが、中に於て本山方は孔雀明王經・不動經・神變大菩薩諸式を數へ、當山方は孔雀呪・千手陀羅尼・大佛頂・大隨求の眞言陀羅尼等を數へてゐる。平常讀誦するものには、法華・大日・般若・阿彌陀・金光明等の諸經があるが、こゝには修驗道としての特別の場合に用ひらるゝものを擧げた。【作法・用具】本山方は、大峰葛城の兩峰修行を以て專要とし、當山方は、御嶽精進を以て專門の勤めとした。峰入精進の間は、有髮なるを法則とする。峰入りは、先づ五十日、又は百日を期して一定の場所に籠り、寫經誦呪、俗念を離れて潔齋し、いよ〳〵峰に入れば、捨身求道の練行をなし、八葉の中臺に擬せらるゝ深山に灌頂を受けて印可せらるゝのである。修行の淺深によつて、新客・一僧祇・二僧祇・三僧祇・正先達・大先達の階次があり、これに伴つて、衣體・用具の上に差別がある。衣體や用具には、開合の差によつて、十二道具・十六道具が擧げられる。十二とは篠懸・結袈裟・頭巾・法螺・伊良太加珠數・錫杖・斑蓋・笈・肩箱・金剛杖・引敷・脚絆であり、これに檜扇・柴打・走繩・草鞋を加へて十六とする。但しその瑣末な點に至つては、兩派に多少の相違がある。これ等の服具には、その制法に於て、用法に於て、特殊の意義があり、以て能くその修驗の目的に添ふのである。例せば頭巾とは、折頭巾のことであるが、「祕決」には頭襟に作り、これを說明して、「頭とは衆生の頂上、襟とは衆生能生の妄想なり。十二の襠は衆生所具の十二因緣を表す。その色の黑色は、最初の無明を顯はす、無明は煩惱黑暗の義なり。前八分にこれを著くるは、不動の頂上の八葉が、頭襟の內に在るを示す」といふ口傳を出してある。他はこれに準じて知るべきである。篠懸とは丈け短き法衣、結袈裟とは九條衣を疊みて輪袈裟の形とせるもの、伊良多加珠數とは稜角ある珠の念珠であり、斑蓋は又檜笠ともいひ、頂上に八角の錦をつける。引敷は鹿皮、又は熊皮の座具、柴打とは鍔のない刀である。【沿革】文武天皇の頃、大和國大峰葛城等の山嶽を跋渉し、孔雀明王呪を持して、靈驗を現はした役小角を以て開祖と仰いでゐる。その後に、泰澄・法道の如きがあつて、同じ道を修し、平安朝に至り、傳教・弘法・慈覺・智證の如き高僧が、相次いで諸國の深山を開いたので、この風大に勃興し、又密教の興隆に助長せられた。中にも熊野に參籠せる智證は、重要な位置を占めてゐる。その後、醍醐天皇の時、理源大師聖寶が、金峰山に修練し、峰の中にて灌頂を行つてから、この道は正しく形式を備へ、佛教中に一地位を占めることとな



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つた。それで聖寶を以て中興の祖と稱するのである。密教に、東密・台密の區別がある以上は、修驗道にも自ら二派を生ずべき運命を有する。眞言宗のを當山派といひ、天台宗のを本山派といふ。聖寶の門人助慧が、大峰檢校となつたのが、當山派の起原であり、堀河天皇の時、白河法皇の熊野御幸に先達を勤めて、熊野三山檢校に補せられた三井の增譽をもつて本山派の起原とする。當山派は醍醐寺を以て本寺とし、本山派は聖護院を以て本寺とする。修法上の本尊として、前者は金峰山の金剛藏王權現を、後者は熊野三所權現を安置する。平安時代には貴族の經濟的保護を蒙つて盛大であつたが、その後期に至つて貴族が凋落するや、經濟的危機に直面し、それを打開する爲に武士、農民階級に働きかけ、零細な財物を集めんとして、山伏が諸國に配置された。彼等は農民の出で、素質も教養も低かつたが、平易化された密教を農村に持込み、所謂民間信仰なるものゝ内容を著しく豐富にした。鎌倉時代以後、彥山・羽黑山・白山・戸隱山・大山などが中心となつて何れも國峰と稱せられ、當山・本山と區別されたが、後に隨所で獨自性を發揮して混亂を招いたので、慶長十八年に至り、諸國の山伏を、醍醐の三寶と京師の聖護との兩院に分屬せしめる事となつたが、併し長き歷史を有する國峰の中には、兩院の統轄を受けざるものもあり、而もまた法相宗や日蓮宗に屬する修驗道もあり、他の諸宗の如き本末の關係が明白で無いやうである。明治五年に至り、太政官布達を以てこれを廢止し、眞言・天台の二宗に分屬せしむるに至つて、宗風大に衰へた。

【參考】山嶽修行岸本英夫（宗教現象の諸相）所收）

**朱子學**（しゆしがく）「漢學」を見よ。

**朱舜水**（しゆしゆんすい）儒者〔字號〕名は之瑜。字は魯璵。舜水はその號。私謚して文恭といふ。〔生歿〕明の萬曆二十八年、浙江省餘姚縣に生れ、我が天和二年（一六八二）四月十七日江戸駒込の水戸藩邸、後の第一高等學校の構内に歿す。享年八十三〔墓所〕常陸國久慈郡太田町瑞龍山の麓に葬る。〔閱歷〕早く父を喪ひ長ずるに及んで六經を精研し、崇禎の末、恩貢生に擢んでられた。屢々徵命を蒙つたが辭して就かず、避けて舟山に往つた。時に淸の兵が江を渡り急に明を攻めた。舜水は乃ち海を渡つて我が國に來り、尋いで交趾に移り、再び舟山に還つた。その意は常に外國の援兵を得て明朝の恢復を圖るに在つたのである。嘗て安南に往つた處、國王は舜水を自國に用ひようとし、召見して任命を拜せしめようとしたが、舜水は長揖して拜せず、安南の君臣皆その義烈に感じたといふ。萬治二年四たび我が國に來り、終に復た明に還らなかつた。時に窮困頗る甚だしかつたが、柳川の儒員安東省庵がこれに師事し、俸祿の一半を贈つた。寛文五年、水戸侯德川光圀、その學識を聞き、聘して賓師とした。〔人物〕性嚴毅剛直、博覽强記、その學生に教授するや孜々として倦まず、且つ古今儀禮の大典より宮室器用の制、農圃梓匠の事に至るまで通曉せざる所がなかつたので、光圀もその多能に服したといふ。〔著述〕舜水文集二十八卷。光圀が世子と共に編輯したもので、每卷己の名を署し、冠するに門人の二字を以てした。

【參考】舜水先生行實並略譜　續々群書類從第三〇朱舜水全集

朱舜水筆蹟（高野辰之氏藏）

**主情主義**（しゆじやうしゆぎ）〔佛〕Le Sentimentalisme

【解說】主知主義の文藝に對して主情主義の文藝なるものが擧げらるゝ。古典派文藝に對しては浪漫派文藝なるものがそれである。浪漫派文藝は個我の徹底的開放の文藝であるといはれる。そして個人なるものの他より區別せらるゝ重要な點は、理智に於てではなく、情緒に於てである。理智は本來が共通性を持つてゐるものである。情緒は個々人によつて異なるもの、好惡の感じは人々によつて同一物に對しても異なるものである。それ故、主情主義文藝は勢ひ個人主義文藝といふ事が出來る。主として個人の情緒を表はす文藝である。個人情緒はそれ自身に限つては弱いものである。センティメンタルといふ語が、時には女々しいといふ意味を持つことのあるのもそのためである。それが情緒でなく情熱といふものになる場合は强くなる。センティメント（Sentiment）でなく、パッシオン（Passion）となるのである。主情主義は自己の情緒を自然なり人間なりの對象物へ浴びせかけ、そのものが自分と同じ感じを抱いてゐるものの如く思ふのである。「山が笑ふ」といひ、「海が嘆く」といふ。人間の感じを自然も同じく持つものと思ふのである。また人間に對してもさうである。自分が好きだと思ふ人は、先方でも自分を好くものと考へる。それ故、戀愛が容易に心に生じて來る。けれど必ずしもその感じが客觀的に價値があるとは言はれぬ。そこで失戀が生ずる。主情主義文藝は、それ故主題としては大方の場合、自然美と戀愛を取扱ふやうになるのである。〔吉江〕

**修禪寺物語**（しゆぜんじものがたり）戲曲　一幕三場（春花戲曲十種の一）〔作者〕岡本綺堂〔發表〕明治四十四年一月「文藝倶樂部」〔刊行〕現代戲曲全集（岡本綺堂篇）・日本戲曲全集（現代篇）所收〔由來〕「伊豆の修禪寺に賴家の面といふあり。作人も知れず……（下略）」觀來つて一種の詩趣をおぼゆ、當時を追懷してこの稿成る」と作者自身が記してゐる。〔興行〕明治四十四年五月、東京明治座初演。

〔役割〕夜叉王（市川左團次）、姉娘かつら（市川壽美藏）、妹娘かへで（市川松蔦）、春彥（市川市十郎）、下田五郎（中村又五郎）、修禪寺の僧（市川左升）、金窪兵衛尉（市川荒次郎）、頼家（市村羽左衛門）等。その後も屢々上演され、一九二八年の露西亞行きの際の演出目錄の中にも加へられた。又同年、佛蘭西の俳優によつて巴里のオデオン座に飜譯上演された。

【梗概】〔第一場〕伊豆の國狩野の庄修禪寺村桂川のほとりの夜叉王といふ面作師の住家。氣位高く、常にその身の出世ばかりを夢みてゐる姉のかつらと、名聞を好まない職人氣質

の、全くその分に満足してゐる妹のかへでとが、紙砧をうちつゝ各々のその立場を固執して言ひ爭ひをする。それを細工場から夜叉王が制止する。夜叉王は將軍頼家から下命された面を打つのに日夜苦心してゐる。妹妹はやがて夕飯の支度に臭へ立ち、かへでの夫の春彦は大仁の町へ鑿と小刀を取りに出て行つたあと、修禪寺の僧に案内させて、下田五郎景安を從へ、直々に頼家が誂へたその面の催促に來る。夜叉王は、いくら打替へても氣に入つたものが出來ないので、ついのび〳〵になつたと言譯する。氣の短い頼家は、その言譯を聽かない。側から景安や修禪寺の僧がいろいろとりなして、いつ出來るといふはつきりした期間をいへといふが、夜叉王は、「これは生なき粗木を削り、男・女・天人・夜叉・羅刹、ありとあらゆる善惡邪正のたましひを打ち込む面作師、五體にみなぎる精力が兩の腕におのづからあつまる時、わがたましひは流るゝ如く彼に通ひて」、はじめて面といふものが作られるのだから期日はいへないといふ。同時に、よしどんな咎めをうけようとて、夜叉王といふ名が惜しいから心に染まない細工を世に殘すのは嫌だといふ。頼家は激怒して手打にしようとする。奥からかつらが走り出て、面は出來てゐるといつて細工場からもつて來る。頼家も、景安も、修禪寺の僧も、それを見て感嘆し、これ程立派なものの出來てゐるのに、なぜ今迄強情を張つたのだと笑ふ。夜叉王は、その面には死相が現はれてゐるからだめだといふ。しかし頼家にはその面が氣に入つて持ち歸ることになり、それと一緒にかつらをも召抱へることになる。かつらは望みの叶つたのを喜んですぐ從つて行く。そのあと、夜叉王はあんな出來損ひの面をわが作と呼ばれる末代迄の恥辱を思つて、職人もけふ限り、再び槌は持つまいと細工場の壁にかけた種々の面を打碎かうとする。かへでは驚いてそれを止める。〔第二場〕桂川のほとり、虎溪橋の袂。頼家はかつらを連れて橋を渡りながら、いとしめやかに戀を語る。かつらが將軍家の側近く召出された身の冥加を喜ぶと、頼家は、かつらに若狹の局と名告ることを許す。その時月は雲に隱れた。鎌倉から北條の討手として向つた金窪兵衛尉が、さあらぬ體に立現はれて頼家の油斷を窺ふ。頼家は早くもそれと察して、遂に、物の具に身を固めた夜中の不法の參入を咎める。そしてそのまゝそこを去る。兵衛尉はこの上は御座所に寄せかける外はないと、引連れた軍兵に密かにその旨を授ける。〔第三場〕もとの夜叉王の住家。修禪寺で撞く早鐘に交つて陣鐘の音烈しく聞えて來る。夜叉王とかへでとが、うろ〳〵してゐるところへ、春彦が歸つて來て夜討の次第を語る。そこへかつらが直垂を着て長卷をもち、頼家の面を持ち、手負にて出て來て門口で倒れるのを、春彦とかへでとが介抱する。かつらは奉公はじめの奉公納めと、この面をつけて頼家の身替りに立つたといふ。かへでがその淺ましい手負の姿を泣くと、たとへ半響一響でも、若狹の局といふ名まで許されて出世の望みのかなつた上は、死んでも恨みはないといふ。その時修禪寺の僧が逃げて來て頼家の最期を語る。失望してかつらの失神するのを見て、夜叉王は、かつらも死んで本望だらうが自分もこれで本望だといふ。なぜなら幾たび打ち直してもこの面に死相の現はれるのを自分の技の至らないためとばかり情けなく思つてゐたが、今となつて見れば、決してそれは自分の技の至らないせゐではなく、すでに頼家にさうした命運が襲ひかけてゐたのだ。「神ならでは知ろしめされぬ人の運命、まづわが作にあらはれしは、自然の感應、自然の妙、技藝神に入るとはこの事よ」といつて快げに笑ふ。そして若い女の斷末魔の表情を後の手本に殘して置きたいと、筆を執つて死んで行くかつらの顏を紙に寫しとる。

【追記】作者は、この作を左團次に當て嵌めて書いたが、この作者の出世作になつたと同時に、左團次にとつても出世藝になつた。作者はこの作に於て明かに歌舞伎劇への叛逆を企てた。そして左團次は、夜叉王役によつて、明かに歌舞伎の殼を脱した新しい演技を創造した。

〔久保田〕

**酒泉傳說**（しゆせんでんせつ）

【解說】今ある日本の酒の泉の古跡といふものには、多分よその國には見られまいと思ふ特徴があつて、それがほゞ各所に共通してゐる。例へば「阿波傳說物語」に採錄せられた寶田村大日堂の靈石では、昔一人の魚賣の男が、毎日この石の穴から滴る清水を飲んで、醉つて歸つて來ては女房を擲るので、女房が恨めしがつてその跡をつけて行き、この酒の泉を見つけて汚れ物をこれに投じたので、それを限りにもう湧かなくなつたといふのだが、よく似通つた話は沖繩本島の南部にも一つあつたさうである。下目黒の行人坂附近では、その醉つて歸つて來るのが長者の家の馬方であつた。主人がこれを知つて慾心を起し、一人で汲んで來て賣つて儲けようと思ふと、もうその時にはただの水であつたと傳へてゐる〈十方庵の「遊歷雜記」〉。「新編風土記稿」にある目黒千代ケ崎の饐魚井の話は、多分同じ處の傳說かと思はれるが、既に千代といふ孝女が老いたる母のために酒を求めてゐたら、この泉が酒であつたといふことになつてゐる。これを美濃養老瀧の物語の同化と解する人は多いであらう。しかし所謂養老孝子譚は著名であり、古くは「古今著聞集」にも「十訓抄」にも、既に筆錄せられてゐるが、なほそれよりも以前の形があつて、併行して口承文藝の間には永く殘つてゐたのかも知れぬ。それはかういふ傳說の變化を比べて見て、その自然の先後を察知することによつて、追々にこれを確かめ得られると思ふ。東日本に分布してゐる數多くの酒泉遺跡では、何れも一致して老いたる父が醉うて還り、その子が行つて掬むとただの清水であつたといふ話になつてゐる。越後養峰の頂上にある「親皆酒の子は清水」、出羽から會津へ越える沓掛坂の「親は諸白子は清水」の茶屋など、旅人の聞いて珍らしがる話はよく似てゐた。東京の近くでは上板橋の西に在つた清水、交入の酒泉潤などと名づけてゐたもの、それから北多摩郡清戸下宿の「こは清水」などもそれであつた。下總でも印旛沼の沿岸に記錄に存するだけが五箇所以上あり、共に同じ口碑と名稱とを伴うてゐた。印旛郡吉岡にあつたといふものなどは、「舊編佐倉風土記」には、漢文で子也泉と記してゐるが、話を見ればやはり又一つの「子は清水」であつた。通例强清水の文字を宛てた名水は諸國に多く、右の如き傳說は無くても大抵は皆神の泉であつた。或はこの水を以て神を祭る酒を釀す習ひであつた事が、偶然にこの種の昔語りを根付かしめるに都合がよかつたのでなからうか。何にもせよ我々の酒泉傳說が、曾て一般の靈異であつたとは

言はずに、必ず或る一人の特に惠まれたる者と、個人的に結び付けられてゐたのは意味があらうと思ふ。昔親孝行の子が親の求めによつて遠方の水を運び來り、途中で親既に歿すと聞いて、その水を棄てたのが、永く殘つて小さな湖となつたといふ傳說は、飛騨の中山峠の孝池水にもあり、これと極めて近い話は又越中西境の夫池にもあつたが、これ等は共に酒の泉ではなかつた。酒の泉の奇瑞の最も多く說かれてゐたのは、通例は昔話（別項）の方であつて、それが旅をする游藝の徒によつて語り歩かれてゐたことが、諸國「こは清水」の由來譚の、これほど一致するやうになつた原因ではないかと思はれる。酒を見つけて長者になつた昔話は國々に多く、奥羽では鹿角のダンブリ長者が、蜻蛉に教へられて酒の湧く泉を見つけた話があり、又は蕪燒笹四郎が蕪を引抜いた穴から、泉酒が流れ出したとも謂つて、その「いづみざけ」の祝言歌は、弘く南北の端々にも流布してゐる。猿地藏といふ昔話は、或る正直爺が猿に招待せられて富貴を得たことを語るものだが、その石見國に行はれてゐる一例では、やはりその爺のみが谷に下つて水を飲むと酒であり、隣の慾深爺は眞似をして失敗したことになつてゐる。旅と傳說、昔話覽。我々の傳說が各地よく一致したものにはかういふ昔話の再土着といふことを想像して見ないと、說明し難いものがまだ幾らもあるやうである。〔柳田（國）〕

【參考】孝子泉の話（鄕土研究四／八・九）

**主題**（しゆだい）　藝術論〔英〕Thema　【解說】藝術表現の最初の動因として作家に選ばれた題材をいふ。主題はそれ自身材料であつて美的意味を持たない。しかし何を主題とするかは作家の創作の態度を決定するに與り、又表現の技術的方面を左右する。殊に文學の主題は創作家の傾向を示すものであつて、表現の心理に於て知的な作用が敏活に働く。〔村田〕

**酒中日記**（しゆちゆうにつき）　小說　【作者】國木田獨歩【發表】明治三十五年十一月「文藝界」【刊行】同三十九年三月、短篇集「運命」、杉本彩雲堂。國木田獨歩全集第一卷所收。

【梗概】馬島といふ人口百二十人ほどの小島へ飄然とやつて來て、私塾を開いてゐる大河といふ三十二三歳の男が、日記體にして身の上話を語つてゐるのである。彼は東京の或る小學校の校長をして夫婦と子供一人の生活をしてゐた。母と妹とは別に赤坂新町に下宿を開いてゐた。時は日清戰爭の最中、軍人の幅のきく時で、下宿人等は皆下士官等の軍人で、彼の母と妹とはそれ等を相手に隨分目に餘る仕打もやつてゐた。そして母は酒に醉つては度々大河の處へ金の無心を言ひに來た。薄給の身では思ふに任かせない。妻が唯一の寶としてゐる帶までも質へ入れて親の命に從はうとしてゐる。その時、小學校改築問題が起つて寄附金が次第に集つて來た。その寄附金のうち百圓を受取つて机の抽斗へ入れて置いたのを母親に竊かに持つて行かれて了つた。彼は面と向つて母にそれを打出して言ふ勇氣もない。呆然途を歩いてゐる間に、大金のはひつてゐるカバンを拾つて、その中から百圓だけ一時寄附金の方へ廻はして置かうかと算筭へしまつて置いたのを妻に發見され、狼狽して家を飛び出すと、妻はあさましさに子を負うて井戸に投じて死んでしまつた。彼は辭職して慰勞金として得た金で、寄附金とカバンの金とを償ひ、殘餘を持つて漂泊の旅へ出て、西國の小島へ落ち着いたのであつた。日記はそれで終つてゐるが、この氣の毒な大河は、島で愛した女に一人の子を殘して、船から落ちて水死してしまつた。

【批評】この作にも、一種の女難の如きものが描かれてゐる。女性に對する作者の呪ひの聲とも見らるゝのである。漂泊の旅へ追はるゝ人間の陰に女性の恐ろしい力が働いてゐる。この日記は、現實の島の生活描寫と過去の回想の中に浮ぶ母と妹及び小學校をめぐる幾多の人々、更に敎師たる彼の良心の苛責、及び明治二十七八年頃の社會の姿まで織りまぜて巧みな轉換を示してゐる。相當複雜味のある種々考へさせらるゝ作品である。

【上演】眞山青果に依つて、四幕九場に脚色され、大正八年五月明治座上演　井上正夫が主人公に扮した。尤もこの脚色は可なり思ひ切つたもので、原作とは大分變つたものになつた。時代の背景も、脚本では日露戰爭頃になつてゐる。〔吉江〕

**出家と其弟子**（しゆつけとそのでし）　戲曲　六幕附序曲【作者】倉田百三【發表】大正五年十二月「生命の川」【刊行】同六年六月岩波書店。現代戲曲全集（倉田百三篇）・日本戲曲全集（現代篇）所收。英・獨・佛・支、その他にも飜譯されてゐる。【上演】大正八年七月有樂座で、創作劇場の手に初演され、後、舞臺協會の人々によつて何回となく上演された。

【梗概】〔一幕〕流罪の歸途にある親鸞が、或る雪の夜、その弟子達と日野左衞門のところへ、宿を乞うて酷い目にあふが、親鸞は怨みもせず軒下に休んでゐるのを見て、左衞門も根からの惡人でなく、その非を悟り、却つて親鸞の深い愛他力心願の敎に歸依する。〔二幕〕既に都に歸つて眞宗を說き、忽ちにして弘布され、西の洞院に盛んな御坊が建つて善男善女が殺到してゐる。左衞門の一子杉若も唯圓と改め、親鸞の愛弟子となつてゐる。親鸞は彼を初め多くの弟子に益々信念を深める他力本願の趣旨を說き、遙々やつて來た同行の男達にも、微恙の中で快く會ひ、その敎を語るのであつた。〔三幕〕親鸞の一子善鸞は、人妻との戀愛事件が元となつて、勘當されてゐるのであるが、純眞な若者の彼も戀の成行と人生への惱みのために、却つて頽廢的な生活を送り、木屋町の遊女の許に流連の姿だ。が、父思ひであり、寂寥に惱む彼は、やはり純な心に一味相通ずる唯圓を呼び、心の苦しみなどを訴へる。が、この後度々唯圓が善鸞の許にと、遊女のゐる木屋町へ行くことが問題となり、親鸞もそれとなく戒めるが、唯圓は寧ろ善鸞の苦しい心持を說いて、會つて上げてくれと頼む。併し親鸞は周圍の人々の平和のためにとて會はない。〔四幕〕唯圓は木屋町を幾度か訪れるうち、今は善鸞の戀人淺香の朋輩楓と戀し合ふ身となり、手紙のやりとり、用件にかこつけて、僅かの外出の時の逢瀨を樂しむ身となつてゐた。〔五幕〕これが知れて唯圓は仲間から嚴しい問責に逢ふが、思ひ切れぬといふので、遂に親鸞にまで訴へられる。が、親鸞は自分の苦しい過去を思ひ、裁きをせず、人々には許してやれといひ、唯圓には、誠の聖い賢い戀の「愛」にまで昇るべきを諭す。〔六幕〕高齡九十歳にして病み、既に臨終も近い。弟子達は慌しく往來して、心痛してゐる中へ、長く父と乖離してゐた善鸞も知らされて驅けつける。親子は悲痛な會見をする。親鸞が子の愛より、「佛を信ずるか」と

いふ問ひに、同じ心境を持ち得ない善鸞は、又佯りを云へぬ男で、遂に「信ずるといつてくれ」といふ悲しい父の願ひも、斥けてしまふより仕方なかつた。死期の迫る親鸞は、それでも「皆そのまゝで助かつてゐる」といひつゝ、調和した世界を夢みつゝ、清らかな惱みの多い生を終へて、大往生を遂げて行つた。

【解説】眞宗の教祖親鸞を拉し來つて主人公とし、「歎異抄」の宗教的眞を戯曲化せる大作で、倉田氏の出世作であり又代表作である。この戯曲はその人道主義的な、そして自由戀愛主義的な當時の風潮に合し、書物としても一時に百數十版を重ね、出版界を風靡したものであつた。ロマン・ローランも、讃譯を見て「現代世界の宗教的作品の中、最も純粹なもの の一つ」と激賞の手紙を書いたといふことである。

〔關口〕

**流語**（じゆつご）「文」を見よ。

**出産**（しゆつさん）小説【作者】徳田秋聲【發表】明治四十一年八月「中央公論」【刊行】明治四十二年四月短篇集「出産」。現代小説全集（徳田秋聲集）所收。

【梗概】努は午後から苦しい金策に駈廻つた。夕方になつても金は出來ない。家へ歸つて見ると、細君の年子は、今夜にも生れさうだといつて苦しんでゐた。金の出來ないのを知つて、細君が妹のお靜を質屋へ走らせようとするのを、俺が行くと言つて努は包を抱へてまた出て行つた。「子供が産れる時と云ふと、何時でも恁う……」と年子はホロリとした。努は質屋の格子を開けて入つて行つた。既に幾組もの先客がゐた。努もこゝでは馴染だつた。此處へ來て取引をする誰彼の樣子を眺めてゐると、彼は何となく安易な感じがして來るのだつた。努はなにがしかの金を懷にして其處を出るとすぐは歸らないで、書生時代に行きつけた近くのビヤホールへ入つた。代が變つてしまつたらしく、知つた女の名を訊ねても分らなかつた。努はまた他の女を憶ひ出して暗い横町へ入つて行つた。が、その女ももうゐなかつた。三時間以上もして、彼がやつと家に歸つて來ると、子供はもう産れてゐた。親類の者も來てゐた。早く見ろといつて伯母が、赤子を努に差しつけた。「これから一生見るんだ」と、努は些と見向いたまゝ何とも言はなかつた。義兄は祝を述べて猪口を差した。努は默つて無意識に二三杯酒ばかり呷つてゐた。

【批評】硯友社の流を汲みながら、この作者の作は自然發生的に、自然主義的傾向を示してゐた。それが、作者をして自然主義勃興の機運に乘ぜしめた所以で、この一短篇は、自然主義作家としての作者を確認せしめた最初の作であらう。因に、同名の短篇集は、自然主義文學勃興期の一記念として、獨歩の「獨歩集」、花袋の「花袋集」などと同列に置かるべきものであらう。

〔加藤〕

**出定笑語**（しゆつぢやうせうご）國學書　六卷【著者】平田篤胤【名稱】富永仲基の「出定後語」から得たもの、別名「佛道大意」。【成立】文化六年頃、著者が當時の神道界に吉田家と並んで勢力のあつた白川家の囑託として行つた講義の筆記で、同八年に成つた所謂講本の一。【諸本】嘉永二年八月都下資政の序のある刊本がある。平田篤胤全集第一卷所收。【解説】印度の地理・歴史・風俗・傳説から釋迦の生涯、佛典後人撰述説、佛教傳來概要、日本佛教諸宗派の起原及び教義等について論述したものである。著者は三度「一切經」を讀破したといはれるほど佛典に精通してゐたが、その佛教研究は、一に前記の「出定後語」及び服部天游の「赤倮々」に導かれたものであると著者自身はいつてゐる。仲基・天游は、「諸佛經は一部一册として釋迦の眞經ではなく、皆後世の僞作」たることを唱へ、西教寺の湖音これを駁し、當時佛教界に大なる問題を提起したのであつた。著者がこの二人者の所説に深い共鳴を見出したのは、彼の佛教研究の意向が、客觀的乃至信仰的にこれを理解しようとするのではなくて、一に古道闡明の手段として、所謂「僧侶をさとすには佛書」を以てしようとするにあつたからである。從つて彼の佛教批評は、その博引旁證にも拘らず、結局古神道を立場としての非難攻擊であつて、文獻に資料を仰いではゐるが、眞に文獻學的方法ではない。例へば見性の批評にしても、まづ佛教でいふ性の眞の意義を理解しようとはしないで、勝手にこれを限定し、それを基礎として批評を進めてゐる。なほ釋迦が生老病死を厭ひ、解脱を求めたことについて、「ああべらぼうなるかな、ああくそたわけなるかな」といふ如き調子で評し、「尻の毛へ火の付いたやうにそれをいやがり周章さわいだがやつぱり死んだ」といふ調子で揶揄してゐる如き、俗言や譬喩の奇拔さで、大衆の心に訴へる講談ぶりは、その博引旁證と相俟つて、當時の社會にあつては有力な思想運動であり、宣傳であつたらうと思はれる。

【參考】印度藏志　平田篤胤〇出定笑語和解　湯谷基守

**出世景清**（しゆつせかげきよ）淨瑠璃　五段　時代物【作者】近松門左衛門【名稱】作者が竹本義太夫のために書き卸した最初の新作で、幸先よかれと出世の語を冠らせたのであると思はれる。筑後掾正本の題簽には「出世かけ清」と五字に記す。四字名題の訓み方については覺一檢校の弟子、景一清一の緣により、「しゆつせけいせい」とすべしとの説もあるが、如何か。【興行】貞享三年二月四日初日、竹本座。

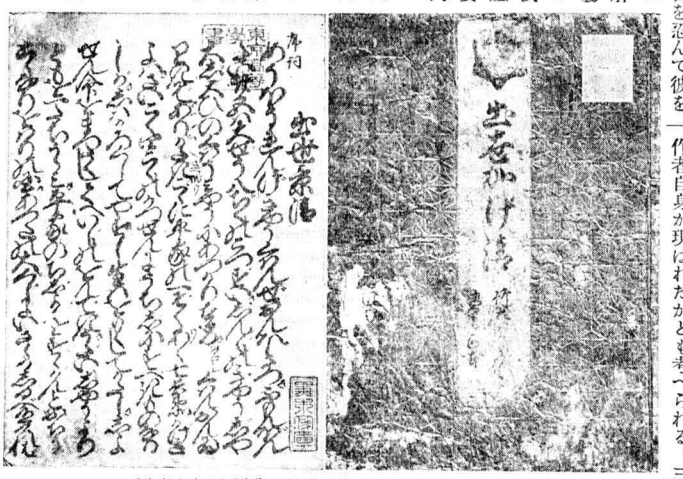
【諸本】十行二十六丁本（山本角太夫正本かとの説がある、山本版）、十行三十二丁本（竹本筑後掾正本。山本版と鶴屋版とがある）。近松傑作全集第二卷・近松淨瑠璃集上（有朋堂文庫）・近松門左衛門全集第一卷・近松全集第二卷・大近松全集第二卷・近松名作集上（名著文庫）等に所收。

【題材】幸若舞曲の「景清」（別項）や、これに據つた古淨瑠璃「かげきよ」等を粉本とした改作である。その他、部分的に古淨瑠璃や謠曲を多く利用してゐる。

【梗概】〔初段〕豫て頼朝を窺ふ惡七兵衛景清は、熱田大宮司方に身を寄せて、その娘小野姫を娶つたが、畠山重忠が、東大寺大佛殿再興の奉行として下ると聞き、まづ彼を討たんと計る。普請の人足に交つたが、見露はされて多勢の圍みを危くも斬り拔ける。〔二段〕清水坂の遊君阿古屋は景清との仲に儲けた二人の男子、彌石・彌若を養つてゐる。三年越しで訪れた景清は、その夜觀音に參籠する。その後に來た阿古屋の兄伊庭の十藏は、景清召捕の恩賞を得んとて妹を説く。阿古屋は兄の不心得を諫めたが、恰も小野姫から來た飛脚の文で、嫉妬の餘り、終に兄をして六波羅に訴へさす。その夜半、景清は江間小四郎の勢に圍まれたが、血路を開いて東路に落ちる。〔三段〕六波羅では景清を誘き寄せようと舅を捕へた。悲歎に暮れた小野姫は、父を尋ねて上

洛する。（小野姫道行）忽ち梶原源太のために捕はれた姫は、湯桶責、古木責、火責の拷問にかけられて息も絶えんとする折、景清が現はれて舅と姫を救ひ、自ら縛につく。〔四段〕景清は六波羅の獄屋に、身動きもならぬやうに繋がれたが、姫はひとり人目を忍んで彼を慰めた。阿古屋も子供を連れて詫びに來たが、景清の怒りが解けぬため、わが子と共にその場に自害して果てる。通りかゝつた十藏に嘲弄された景清は、憤然起つて牢舍を破り、十藏を殺して、再び牢舍に入つて元の姿を裝つた。〔五段〕景清の獄門首は觀音の御首に變つてゐた。清水寺の大衆は觀音の御首が失せて、その切口から血が流れたと訴へる。頼朝は佛力を畏み、景清を許して改めて日向國宮崎の庄を賜はる。景清は酒宴の席で、人々の請ひに任せて鏡引を物語り、さて頼朝を見ては怨念が兆すからとて、兩眼を抉つてその恩に謝す。

【構想】初段は、謠曲「大佛供養」の構案に過ぎぬが、脚色の態度には、注目すべき點が考へられる。例へば、本段以下に現はれる畠山重忠は、題材に用ひられた先行曲より遙かに人間的に描寫されたがために、今後の景清劇を通して、重忠の地位は非常に重要なものとなつた。又熱田大宮司に就いても、その娘小野姫を點出した所に、阿古屋の嫉妬を自然ならしめ、悲劇的素因を造り上げた功が見られる。二段目から四段目に至る主な筋は、先行曲からの直接的なものであるが、慾のために情人を密訴したあこわうを純情な女として、全く反對な性格に描き替へた本曲作者の手腕は十分認められねばならぬ。而もこゝに作者自身が現はれたかとも考へられる。三段目の小野姫拷問の場は、古淨瑠璃「平王の姫」から、四段目の景清獄舍の場は、古淨瑠璃「湯殿山大日如來御本地」から、それ〴〵得た案である。五段目は、謠曲「景清」に據つて鏡引を入れたのは、最後の場面だけに極めて效果的である。かくして本曲は、一見先行曲の集積に過ぎぬやうに見られるが、戲曲的葛藤の展開を自然ならしめ、殊に場面の配合に留意した事は、作者の苦心の存する所であらう。【史的地位】竹本座創立の初め、作者近松は加賀掾に書き卸した作品を、專ら義太夫に與へてその正本として來たが、漸く創立の整理も了へたので、始めて義太夫のために新作淨瑠璃を綴つたのが本曲である。故に本曲の發表によつて、義太夫は完全に加賀掾と相對し得たのである。これがためには、作者の決意の程も窺はれるが、事實、旗揚げ以來の舊作正本に比して、本曲の脚色は遙かに高い價値が認められる。題材に景清を選定したについて、淨瑠璃の祖平曲に因あらしめたとの說を生じた等も、それ等を過重に考へようとした爲めかと思はれる。更に本曲が先行曲を排して、後世の幾多の景清劇は、一に本曲に據つて起きたと見ていゝ。享保十七年、文耕堂・千四作「壇浦兜軍記」（別項）は、淨瑠璃としての傑作であり、明治二十四年福地櫻痴作「武勇譽出世景清」は、歌舞伎脚本として本曲の忠實な改作である。（景清參照）



筑後掾正本「出世景清」鏡・初頁（黑木文庫藏）

【參考】出世景清　饗庭篁村・巢林子撰註）○大近松全集第二卷解題　木谷蓬吟○近松全集第二卷解題　藤井乙男○近松名作集上解題　黑木勘藏（牛隨）

## 出世隅田川（しゆつせすみだがは）

脚本　四幕　お家物

【作者】初代市川團十郎【名稱】吉田松若が家督をとるまでを脚色したので、出世と名付けたのであらう。角書に、「吉野一重櫻、吾妻二本柳」とある。【興行】元祿十四年三月江戸中村座上演。

【役割】吉田少將（村山四郎次）、御臺園生の前（上村井筒）、纏卅來寡院（左近伊兵衛）、少將妹織姫（市川竹之介）、梅若丸（水木姫之介）、松若丸（市川若松）、山岡太夫（山中平九郎）、惡三位（藤田十郎兵衛）、松井の龍存（横山六郎次）、高力美女之介（橘本金作）、班女（郷村小傳次）、山田の三郎（羽山岡右衛門）、同四郎（宮崎十四郎）、不動（山川彦五郎）、粟津の六郎（市川團十郎）、同七郎（鎌若山三郎）、同八郎（中村大藏）等。

【題材】從來の隅田川狂言の脚色を主體とし、これをお家騷動化するために謠曲「班女」を利用し、說經の「山莊太夫」（三莊太夫五人嬢參照）の案によつて、構想を立てたものと思はれる。【梗概】〔序幕〕（玉津島明神）吉田少將が流罪赦免の悅びに明神に參詣して、歌舞伎狂言の催しがある。後室來壽院が實子織姫を愛する餘り、少將と班女との仲にできた若君梅若を失はんと計る。この命をうけた山田三郎は、一の谷狂言に寄せて我が子を身代りに立てようとしたが、辨慶役の松井龍存に留められた。後室の立場は山岡太夫が繕つた。少將の御臺園生の前は實子松若は未だ幼いゆゑに、梅若をも松若同樣に育てようと約した。〔二幕〕（北野天神）織姫の乘物が、下馬所を乘り過ぎようとするので、山田四郎が抑へ、粟津六郎が强ひて戸を開けると、中なるは姫でなくて、贋不動であつた。後室が少將班女を調伏のためと分つたので、六郎はその一黨を斬り散らす。高力美女之介が四郎を出迎へると、美女之介を慕つて織姫が追つて來た。粟津六郎が藁人形の不動に扮したとも知らず、後室が龍存を伴つて惡事成就を起請するので、六郎は委を現はして改心を切に諫めたが、聽き入れないため、遂に後室をとつて伏せた。すると後室の姿は忽ち蛇身となつて逃げ去つた。班女が少將を追つて出て、その無情を怨むところへ、

後室の大蛇が現れて班女に噛みついた。班女の手飼の猫が蛇と闘ふ樣に、六郎が猫の首を討つと、その頭は蛇に飛びついた。（吉田館）班女には猫が乘り移つて、宿直役の六郎を脅かすので、六郎は魔性を退けようと、班女を斬り下げた。少將は怒つて六郎を手討にせんとする時、無事な班女が奥から出て來た。〔三幕〕（淺茅ヶ原）班女と繼姫は粟津の七郎を供に連れて、梅若を尋ねて武藏國淺茅ヶ原に辿りついた。梅若は山岡太夫の双にかゝつて息を引取る時、始めて素性を明かし、塚の上に柳を植ゑよと言ひ遺した。六郎は偶々この塚の邊に來て、泣く〳〵班女から託された衣裳を死骸に着せた。都への歸り途を、橋の上に一宿したが、恰もその橋下に眠つてゐたのが、班女だつた。班女はやがて梅若の靈に誘はれて、山岡太夫の宿に入つて眠る。外から歸つた太夫が班女の衣類を剝がうとした折、六郎・七郎・八郎等がこゝに落合つて救はれ、始めて班女の死が告げられた。その時、班女の後には梅若の亡靈が立つた。〔四幕〕（東國の街道）松若は三位に上り、家督を繼いだが、母や梅若を求めて關東に下る途中、山伏姿で都を落ちた龍存等に出會つて双を交へた。一方、山岡太夫は討らず故主を手にかけたので、班女の双に倒れる覺悟をしたが、六郎に出會つたので、遂に彼のために討たれる。六郎も自刄した。こゝへ龍存等に追はれて來た松若の一行は、まさに危く見えたが、池中から龍神が姿を現はして惡人等を滅した。龍神こそ人身は六郎であつたこと、班女も辨財天の化身の由を示し、松若の行末を守護すべしと誓ふ。

【構想】隅田川物の狂言は江戸に於て古くから流行してゐたが、元祿時代に入り、脚色の進歩につれて種々な樣式の隅田川狂言が現はれた。本作もその一つと見られる。「隅田川」ではあるが、狂亂物の系統から純然たるお家狂言に轉化し得た所に、本曲の成功がある。このために、戀母を置き、少將と異腹の繼姫を出したのであるが、繼母よりも、その腹心となつた龍存が相當に活躍してゐる。更に少將の愛妾を班女として、二人の中に梅若を据ゑ、この母子の悲劇を描くために山莊太夫の脚色を取入れて、山岡太夫を吉田家の重臣としたのである。初めに劇中劇の形式の下に、「義經記」の狂言を見せて、作者の名案を示したが、龍存といふ人物も海存からの轉化かと察せられる。二幕目に見せた猫の精は、水木辰之助によつて、早く上方から輸入された評判の型であつた。攫巧を屢々活用し、殊に最後の場面の如きは、當時の江戸歌舞伎の流行ではあるが、極めて效果的な舞臺であつたと思ふ。併し最も成功したのは、三幕目、梅若の靈が働く部分であらう。

【系統】本曲が狂言本の現存する隅田川物としては最も古いのであるが、狂言としては既に幾多の隅田川物が流行してゐた。但しお家狂言の形式をとり、戲曲的脚色を成立せしめたのは、當年の事で、本曲はその一脚本であると言へる。元祿時代の江戸歌舞伎に流行の脚色であつて、「紅梅隅田川」（元祿十五年三月、山村座、作者中津五右衞門か）、「傾城角田川」（寶永元年二月、山村座）、その他、狂言本の現存するものすら相當算へられる。やゝ下つて上方で近松の淨瑠璃に綴られた「雙生隅田川」（別項）が、この間に注目される作品である。江戸狂言の「出世隅田川」等に見えた松若は、後世成長して、「清玄」に併せて江戸の櫻姫清玄を成した。「櫻姫東文章」「隅田川花御所染」（各別項）「櫻清水清玄」（天保元年三月、中村座、作者二代勝俵藏）、「都鳥廓白浪」（安政元年三月、河原崎座、默阿彌作）の如き最も著名である。一方、「雙生隅田川」からは、惡方に滑稽味を加へて、法界坊が生れた（隅田川續篇染模）。その他、江戸狂言では、曾我や黑舟、五人女等と組む幾多の隅田川が現はれたのである。「双面」や「賤機帶」（各別項）には、その間、所作事として獨立したものである。

（守隨）

## 出世握虎稚物語（しゆつせやつこをさなものがたり）

淨瑠璃　五段　時代物【作者】竹田出雲【題名】木下藤吉郎の出世談といふ義であるが、始めて獨り立になつた作者自身の期待も讀まれると思ふ。「握虎」は名題に陽數を求めて二字にしたので、幸先を祝ふ意を働かせてゐる。【興行】享保十年五月九日初日、竹本座上演。【諸本】七行八十八丁本、十行五十六丁本等がある。【題材】「繪本太閤記」（別項）を主材としたと思はれるが、又當時流行の古淨瑠璃式の讀本淨瑠璃「太閤記」をも活用したであらう。

【梗概】〔初段〕美濃の齋藤道三は今川義元の小田信長討伐の連判に與しつゝも、一方、信長が平手政秀を使者として娘萬代姫を乞ふのを承諾したので、義元の憤りを買ひ、侏儒龍を人質とする。萬代姫の輿入に、政秀は切腹して信長を諫める。不破山の狩場で、義元は信長を討たんとし、信長の寵妾月花とその伯父無食居士を殺したが、却つて信長に敗られる。〔二段〕松下嘉兵衞は、前野村八王子で義元の臣芝山と會し、義元へ奉公を勸められて後、下部の猿冠者こと兵吉を、胴丸の具足を買ひに尾張に遣る。（道行木下閣）兵吉の道行。兵吉の朋輩鐵平と芝山の下部堤内は峰野の原で兵吉の懷中の六兩を奪はうとしたが敵せず、堤内は殺され鐵平は逃げ去る。月花の亡靈に導かれ、信長が兵吉を見出して召抱へ秀喜の名を與へる。〔三段〕豐田の里に住む兵吉の父筑阿彌は伜の代奉公にと松下方に赴く。そのあとへ出世した兵吉が家人加地田隼人を派して白銀を贈つたが、母は應ぜず、娘小牧を白須賀の廓へ賣る。兵吉は信長の命を帶びて松下を軍師に聘せんとしたが斷られる。兵吉は態度を改めて具足を松下に渡さうとしたが、勘當を許されない。小牧がわざと松下の手にかかつて死ぬので、勘當は許された。〔四段〕信長は齋藤の謀を覺つて萬代姫に心を許さずにゐると、兵吉は腰元柳（しなやか）の色に迷つたと見せて、萬代姫の供をし、城を抜けて齋藤方に奔つた。道三は兵吉を喜び迎へたが、信長の襲撃にあつて始めて策に陷つた事を覺り、油賣の昔を語つて懺悔し、城を渡す。〔五段〕月花の亡靈に惱まされる義元は、信長に襲はれて滅ぶ。道三は自害し、信長は改めて萬代姫を迎へる。

【解說】まだ出雲の特徵が十分現はれてゐないが、流石場面の配置照應には優れた案が觀察せられる。見せ場としては三段目を擧ぐべきであるが、五段目に月花の亡靈を働かせた點は感興の深いものがあつたであらう。當時は相當好評の曲であつたらしく、上方の歌舞伎にも上演された外、黑本に「出世稚握虎」を生じたりした。「後太平記」（十三卷目）時代織室町錦繡（近松半二作、天明元年二月竹本座）は、本曲の書き替へである。後太平記の世界は他にも半二や專助等によつて綴られたが、後世に傳はつたのは、「木下蔭狹間合戰」や「繪本太功記」（各別項）等である。

（守隨）

## 出世握虎昔物語（しゆつせやつこわかしものがたり）

淨



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世草子　大本五册　【作者】八文字屋自笑・江島屋其磧【刊行】享保十一年八文字屋八左衞門板【解説】これは、享保十年五月、竹本座上場の竹田出雲作「出世操虎稚物語」（別項）を飜案したものである。その事は序の中にも、「梅の難波の浦珍らしき初鶯の聲を揃へて節をこめたる竹本が淨瑠璃の趣向をみて云々」とあることに依つても知られる。全體の筋は殆と原作の淨瑠璃の通りであるが、淨瑠璃の主人公の名兵吉を藤七としてゐるなど、二三の相違は存する。　〔吉田〕

**出版月評**　雜誌【刊行】明治二十年八月。恐らく我が國に於ける圖書專門雜誌の嚆矢であらう。二十四年八月の第四十號迄出てゐる。發行所は京橋槍屋町月評社。【解説】四六倍判月一回發行、每號凡そ六七十頁內外であつた。明治二十年一月以降、二十四年六月迄の出版書目を完全に收めてゐる。初めは横井鍬太郎が編輯名義人であつたが、六號から福本誠（日南）となり、更に十七號からは松野德之助となつてゐる。新刊批評の執筆者は阪谷芳郎・濱田健次郎・志賀矧川等で、各專門家の公平なものを以て揭げてゐたが、短評的のものは當時無名の長谷川二葉亭等が多く執筆したと傳へられてゐる。〔齋藤（昌）〕

**出版法**　法規　出版物はこれを大別すれば、定期刊行物（新聞紙及び雜誌）と普通出版物となる。昭和二十年終戰迄我が出版法制の下では、定期刊行物は原則として新聞紙法（明治四十二年法律第四一號）に依つて取締られ、普通出版物は出版法（同二十六年法律第一五號、改正昭和九年法律第四條）に依つて取締られた。なほ新聞紙法も出版法も適用せられない特殊出版物に、本曆・略本曆、神社・寺院の守札、神佛號を記載せる書像の類がある。この種の出版物には古い沿革に基いて、太政官布告などの特殊の法規が適用される。普通出版物を豫約出版の方法で出版する場合には、なほ豫約出版法に依らねばならない。出版物は以上各種の法規に依つて取締られてゐたのであるが、今その大體を述ぶれば、出版物の發行には一定の屆出を必要とし、且つその各部册に出版責任者を記載しなければならない。出版責任者は、著作者・編輯者・發行者・印刷者などであつて、これ等の者は出版物の發行手續並にその內容に付き責任を負ふのである。出版物の內容が風俗を壞亂し、安寧秩序を紊亂し、その他一定の禁制事項に觸れる時は、或は出版責任者が司法處分として處罰せられ、或はその出版物が行政處分として、發賣頒布の禁止又は差押を受けねばならない。

【江戸時代に於ける出版取締法令】　印刷術が發明されて、文書・圖畫の大量の複製頒布が可能となり、出版物が社會的重大性を帶ぶるに至るや、官憲は直にその取締の必要を感じたのであるが、その取締は初めは出版前に於ける檢閱の方法で行はれたので、「檢閱は印刷術より只三日若い」と言はれてゐる。我が國に於ても江戸時代の中期頃から出版が盛んに行はれ、幕府及び各藩の出版物の外、民衆的の出版物として浮世草子・讀本・洒落本・滑稽本・人情本・赤本・青本・黑本・黃表紙・合卷・繪本から錦繪や瓦版に至るまで盛んに刊行せられ、從つてそれ等の出版物の取締に關する禁令が寬文・貞享・元祿・正德・享保・寬政・文化・文政・天保などの時代に屢々發せられた。尤も出版物取締の一般的禁令の發布前にも、慶安二年大阪の書肆西村傳兵衞の出板した「古狀揃」、寬文六年江戸の山鹿素行の著はした「聖敎要錄」が當局の忌諱に觸れた例などもあつた。これ等の禁令のうち、寬文十三年に發せられたものが、江戸時代に於ける出版取締令の最初のものと言はれてゐるが、この禁令では公儀の事は勿論、諸人の迷惑すべき事、その他何に由らず、新作の書物を出版するには、その旨奉行所に屆出で、許可を受くべき事を命じてゐる。それから貞享元年には、世敎に害ある小唄・珍事・異聞の類を出版讀賣する事を禁じ、元祿年間にも屢々風俗を害すべき圖書の出版を禁じた。享保六年にも新しい出版物を奉行所に屆出でしめ、雜說或は流言の出版を禁じ、又讀賣を禁じた。又同年新に書物問屋の組合を設立せしめ、彼等仲間に行事を定めて相互に視察せしめ、自治的に取締らしめた。その翌七年十一月には、やゝ詳細な出版令が次の如く發せられた。

一、自今新板書物之儀、儒書、佛書、神書、醫書、歌書、都而書物類、其節一通り之事者格別、猥成儀、異說等を取交へ作出し候儀堅可二慎一無用一事。
一、只今迄有來候板行物之內、好色本之類は、風俗之爲にも不宜儀に候間、段々相改絕板可仕事。
一、人々の家節、先祖の事などを彼是相廻の儀共、新作之書物に書顯し、世上致二流布一候儀有之候、右之段、自今御停止に候、右之類有之、子孫より訴出候に於ては急度御吟味可有之筈に候事。
一、何書物によらず、此の以後新版之物、作者並に板元之實名、奥書に寫し致可申候。
一、權現樣の御儀者勿論、總て御當家の御事、版行書本、今無用可仕候、無二據仔細有之一者、奉行所へ訴出て奢侈を調可申候事。

右之趣を以て、自今新作之書物出候共、遂二吟味一、如二何之一御賞候、若右定に背候者有之者、奉行所へ可二訴出一候、數年を經相知れ候者、其版元問屋共急度可二申付一候、依仲間致二吟味一違犯無之樣可二相心得一候已上。

この禁令は、維新後書物屋仲間の終末に至るまで、永く出版物の取締に關する根本法となつたもので、書物屋仲間では「御條目」と稱へて、每年五月の仲間總會の席上で行事が讀み上げたものである。次いで寬文二年には右の出版令の趣旨を敷衍し、更に繪草紙・錦繪の類の猥らなるものを禁じ、寬政三年には、風俗のため宜しからざる書物を作つたと云ふ理由で、作者山東京傳及び版元蔦屋重三郎が處罰され、京傳は手鎖五十日、重三郎は身上半減の闕所に處せられた。翌四年には、異說を著述したと云ふ理由で林子平が蟄居申付られ、その著「海國兵談」は絕版とされた。文化元年には、繪草紙の類に天正以來の武士の姓名を記載し、又は紋所等を紛はしく記載することを禁じ、繪畫は凡て墨繪のみとし彩色を施すを禁じた。天保十三年六月には、享保・寬政の出版令の趣旨を更に敷衍し、如何なる書籍に限らず、町年寄館氏を經て奉行所へ伺ひ出て指圖を受くべきことを命じた。即ち次の通り（但し最初の三箇條は、享保七年の出版令と同文に付き略する）。

一、唯今迄、諸書物に權現樣御名出候儀相除候得共、向後急度致たる書物の內、押立候儀は御名書入不二苦一候、御身の上儀且御物語等の類は相除、御代代樣御名諸書物に出候儀も、右の格に相心得可申旨、享保度相觸置候處、都而明白に押出で、世上に申傳へ、人々存居候儀は、假令御身の元上御物語たりとも、向後相除候には不二及一候。但假名本等の物は、唯今迄の通り二相心得一候。
右之外、厭書、天文書、阿闍陀書鍾、翻譯物は勿論、何の著述に不二限一、總而書物板行致候節、本屋共より町年寄館市右衞門方へ可二申出一候。同人よ

り奉行所へ相糺し、差圖の上及二沙汰一候節に付、紛敷儀決而無二之樣可二致候一、且又彫刻出來の上は、一部宛奉行所へ可二差出一候、若内證にて板行等致すに於ては、何書物に不二限一、版木燒捨、懸合之者共一同吟味の上、嚴重の咎可二申付一候。

右之通、町中不二洩樣一可二觸知一もの也。

この年、爲永春水が風俗のために相成らざることを書き著したと云ふ理由で手鎖申付けられた。その外、寺門靜軒・柳亭種彦も風俗壞亂の理由で處罰せられた。その後にも、錦繪・合卷物・人情本の類に付き屢々禁令が發せられ、かくて明治維新に及んだのである。

【江戸時代に於ける出版手續】上述の各時代に發布せられた禁令を通して、江戸時代に於ける出版手續の概要を窺ふに、時代に依つて多少の相違はあるが、大體に於て、先づ出版者は、出版せんとする圖書の草稿を書物屋仲間行事又は地本草紙屋仲間の手許に差出して法令に違反しないか、他の板株（版權）を侵害しないか（重版・類版でないか）の檢査（仲間吟味）を受け、その事なしと認めた時は、行事から名主・町年寄の手を經て、町奉行に伺ひ出で、町奉行の取調の結果出版許可ときまれば、草稿は町奉行から逆に行事の手許に戻り、初めてこれを彫刻に付し出版することができた。そして出版圖書には必ず著作者及び出版者（版元）が奥書することを要し、またその一部を當局に納本することを要した。若しこれに違反する時は、著作者・彫刻者・出版者などが罰せらるゝことは勿論、名主・行事なども制裁を受けた。かやうな制度は種々の變遷はあつたが、大體に於て明治七・八年頃、書物屋仲間の解體するに至るまで行はれてゐたやうである。要するに江戸時代に於ては圖書の出版に就いて最も嚴重な、所謂草稿檢閲主義を採つてゐたのである。尤もそれには書物掛名主と云ひ、書物屋仲間行事と云ひ、仲間吟味と云ひ、今日から見れば特色あり自治的機關や制度を同時に設けてゐたのである。（櫻村）

**出廬**（しゆつろ）　詩集　【作者】幸田露伴【刊行】明治三十八年一月、春陽堂。【解説】未刊詩集「心のあと」の序詩として出た。四六版、本文全三百三十二頁の長篇詩であつて、作者は初めに世の悦ぶに足らぬ理を、次に詩の愛を、次に空想境の實在のために累せられる事實を、終りに詩と世間と、實在と空想と相即くべき理を歌つたと説いてゐるが、理説に泥んで詩句の想像性少く、詩語に清新のひびきがない。史的意味を有するだけで、全く失敗の作である。これに「出廬抄註」（同年）が別に刊行せられてゐる。（日夏）

**酒顚童子**（しゆてんどうじ）　御伽草子（二十三篇の一）二卷　【成立】室町期か。繪卷としては香取本が最も古く、御伽草子本これに次ぎ、古法眼本はその後と云ふ黑川眞頼の説（塵補考古畫譚上卷）に對して、この御伽本の方が寧ろ最も新しいのではないかと「近古小説解題」には言つてゐる。【諸本】古板本は御伽草子本。御伽草子後編（久子泉畠山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷・御伽草子（名著文庫）・富山房）等に收めてある。繪卷には「大江山繪詞」「伊吹山繪詞」（各別項）がある。【題材】怪物（鬼）退治の武勇傳説。謠曲「大江山」と同材。同じく謠曲の「羅生門」とも關係がある。本書では三社明神の利益が特に顯著に説かれてある。「廣益俗説辨」（卷十）には、鬼同丸の傳説（古今著聞集卷九）の俗説化か、支那説話の「白猿傳」が本據かと言つて居り（櫻陰雜談）上卷も白環傳本據説、また馬琴は「越後名寄せ」や「奇異雜談集」を引き、併せて一面、「日本紀略」「扶桑略記」等記載の女鬼や、群盜捕戮の史實に基いて成つたかと論じてゐるが（玄同放言）、變裝と云ひ神酒の奇蹟と云ひ、芳賀矢一博士の説の如く素盞嗚尊の大蛇退治神話、次いで日本武尊の熊襲征伐の武勇譚の時代的變形とも見られる。

酒顚童子繪卷（伊吹山繪詞）（島津久基氏藏）

【梗概】丹波國大江山に鬼神が住んで、近國他國から多くの人間を攫つて行くその中に、その手は遂に都の池田中納言くにたかの最愛の美しい姫にまで延びた。卜（うらな）によつてこれを知つた中納言は急ぎ奏聞したので、直に頼光に退治の勅命が下つた。頼光は、定光・季武・綱・金時・保昌（やすまさ）を集めて先づ佛神の力を仰がうと、頼光・保昌は八幡・綱・金時は住吉、定光・季武は熊野へ社參して祈願を籠め、六人山伏姿となつて愈々山に向つた。途に出逢つた三人の翁が、じんべんきどくしゆ（神變奇特——神便鬼毒——酒）と云ふ酒を贈り、案内にまで立つた上、助力を約して消え失せたので、一行は三神の應護と勇んで千丈嶽の鬼が城に到り、細谷川に血衣を洗ふ上臈から、城内の模樣を委しく聽き、羽黑の客僧と稱して童子に謁した。酒宴の席に危く見露はされようとしたのを頼光の辯舌で陳じ了せ、鬼も泥酔の餘り越後の山寺育ちの稚兒であつた昔の素性まで語り出して打解けるうち、神酒の奇特に家來の鬼共まで殘らず酔ひ臥したのを見すまして、一行は笈の中から取出した甲冑に身を堅め、三神の援助を戴いて、身のたけ二丈餘りで赤髪に角生ひ、手足は熊のやうな怪物の童子以下、茨木童子や鬼の四天王（卽ちほしくま童子・熊童子・虎熊童子・かね童子）まで餘さず退治し終り、めでたく歸洛したので、叡感斜ならず、中納言夫婦等は姫との再會を喜び、頼光の武名は一世に轟いた。

【影響】寛延二年刊青本「酒呑童子」、黑本「酒呑童子物語」以下の小説の外、早く古淨瑠璃に多くの「酒呑童子」（別項）の作があり、その後に

も、萬治三年刊六段本「酒典童子若壯」、近松の「酒呑童子枕言葉」を初め、操・歌舞伎にも多くの作がある。（大江山繪詞・伊吹山繪詞參照）

【參考】玄同放言卷三上（第四十二人事、酒顛童子）○近古小說解題○日本傳說研究○近古小說新纂（小武都考說）○酒顛童子の傳說について長谷川臨平（帝國文學十二卷）　（島津）

## 酒呑童子（しゆてんどうじ）

浄瑠璃　五段又は六段【作者】未詳【名稱】「酒天童子」「酒顛童子」「酒典童子」「大江山酒呑童子」等樣々に書く。【刊行】現存正本では、寛文三年版が古いと思はれるが、最初の刊行は更に溯るであらう。【諸本】現存するものについて見るに、大體三種の系統がある。（一）宮內正本。「大ゑやましゆてんどうじ」。十四行十一丁繪入五段本、寛文三年三月刊。金平本全集所收。極めて簡粗な文章である。（二）山本角太夫正本「酒呑童子」、十七行十八丁（カ）繪入五段本、寛文三年刊（カ）。再版は延寶四年刊。宇治加賀掾（カ）正本「酒天童子」、八行五段本、貞享頃刊、新群書類從所收。これは角太夫正本と非常に接近してゐる。所屬不明「大江山酒呑童子」、十七行十丁繪入細字無段本、享保六年春刊。前掲正本の類によつた簡潔な筋書式のものである。（三）土佐少掾正本「酒顛（典とも）童子」、九行四十五丁六段本。角太夫正本の系統とは全然類を異にしてゐる。全體としてはお伽草子に最も接近してゐる。【題材】お伽草子の「酒顛童子」（別項）の飜案である。

【梗概】〔初段〕一條院の御代、源頼光が四天王獨武者達と花の宴を催した時、羅生門に鬼が出るといふ噂に、綱は勇んで馳せ向つたが、果して鬼が綱に摑みかゝつたので、その腕を斬り落してこれを持ち歸つた。その暮方、津の國から遙々訪ねた姥が、頻りに腕を見せて呉れと乞ふので、納めてある朱の唐櫃を開けると、姥は忽ち腕を奪ひ、鬼形を現じて飛び去つた。〔二段〕齡十三歳で美貌の譽れ高い池田中納言の姫の許へ、藤原將監ともとしが婚儀を申入れたが、二條家に先約があるからと手痛く斷つた。これを耳にした大江山酒呑童子の配下の石まく童子は、二條家の使者に化けて、まんまと姫を攫つた。中納言家ではともとしの謀と信じ、怒つてその館に押寄せる。かくて二條堀河で兩家對陣して合戰の所へ、頼光の命で遠江守貞光が馳せ來つて鐵棒を振つて鎭める。〔三段〕中納言家では博士に占はせて大江山の鬼の業と知れた。直に鬼神退治の勅命が頼光に下つた。頼光は、熊野・住吉・八幡を初め諸神に祈り、五勇士を連れて山伏姿で出で立つ。「衣裳の品揃へ、頼光山入道行」一行は險峻な山路を三老翁に導かれた上に、鬼退治のために毒酒や長柄の銚子や破れぬ鎧などを與へられた。老翁は三神であつた。〔四段〕川上で花園少將の姫が泣く〳〵小袖を洗つてゐた。これこそ昨夜鬼に血を吸はれた中納言の姫の小袖だつた。一行が城門から通されると、生臭い風と共に雷鳴稲妻を閃かして酒呑童子が現れた。丈高く色赤く髪は亂れ、大格子の着物に口紅の袴をつけ、鐵棒をついてゐる。頼光は路に迷つた者と觸れて酒を捧げ、自らも血酒を飲み、女肉を食ふ。大酒宴の果ての亂醉に、一行は身拵へを固める。〔五段〕敷はれて巖窟から出て來た多くの上臈達が狂喜の中に、中納言の姫は腕は拔かれ股は裂かれて助ける術なく、父母への遺品を託するのだつた。一行は寢所の酒呑童子を覗つたが、嚴重な構へに當惑する折から、又もかの三神が現れて、童子の體を八方に繋いでくれた。かくて難なく童子の首を取つて都へ上つた。世は再び泰平になつた。（角太夫正本による）

酒呑童子（角太夫正本）

【構想】角太夫正本によつて考察すると、お伽草子と比較して、人名等の相違は隨處にあるが、初段羅生門の條は、謠曲「羅生門」によつて全然新に挿入したものである。そのために初段とその後とは、主役も離れ、筋の連絡も斷たれた。僅に鬼神といふ點で連鎖してゐるに過ぎない。しかし事件が既に戲曲的であるから、一曲の破綻が覆はれてゐるのである。その問題から離れて、お伽草子の簡素な筋書式の形態から見れば、戲曲としてかゝる立體化を得た事は、說話そのものの性質からも極めて效果的であつたといへよう。

【影響】萬治三年八月刊、薩摩太夫正本に「酒典童子若壯」がある。脚色は本曲よりも複雜であつて、これは本曲から派生したものと見るべきであらう。金平淨瑠璃への影響は勿論強くあつたが、後世、本曲から生れた淨瑠璃を初めその他の戲曲の數は夥しい。その主なものは、（一）淨瑠璃に「酒呑童子枕言葉」（近松門左衛門作。寶永四年九月九日、竹本座）があり、これは「弘徽殿后諍」（別項）を交へた作。この四段目の道行が一中節「四天王大江山入」となつた。やはり近松作「傾城酒呑童子」（別項）は、茨木屋幸齋事件を書き込んだ當り作である。「酒呑童子出生記」（梁塵軒作。延享三年五月六日、豐竹座）は「枕言葉」の書替へである。「酒呑童子記」（佐川藤太等作、文化二年二月、豐竹喜代太夫座）の如きもこれ等の末流といへよう。（二）歌舞伎狂言には、早く「當世酒呑童子」（元祿十四年十月、中村座）や「鬼城女山入」（同十五年七月、中村座）等の作があり、主として江戸に流行したが、後になると、酒呑童子自身が、鬼童丸（又は怪童丸）とか、山姥（別項）とかに轉じて發展して行く。顔見世狂言には多少原形を保つたが、中村座の脇狂言「酒呑童子」等には、窟の場が完全に傳へられたといへよう。その他、所謂民俗劇への系統には廣いものがある。又黑本や草雙紙等婦女子相手の小說の題材としては大に歡迎されたものらしい。　（守屋）

## 儒道大鑑（じゆどうたいかん）

「西鶴概論」を見よ。

## 受難者（じゆなんしや）

小說【作者】江馬修【刊行】大正五年九月、新潮社。現代長篇小說全集第二十四卷所收。

【梗概】〔第一編〕歸省中きみ子といふ幼馴染の女と初めて戀に陷ちた努は、新しい希望と

勇氣とを得て東京へ歸つて來た。彼は兄の家から獨立する準備として百枚許りの小說に着手し、その中できみ子の像を不滅なものに描き上げようとしたが、自分の感情に誇張と虛僞とを感じた。偶々產後の病氣で大學病院に入院した姉を見舞つて、見習看護婦森川禮子に强く牽きつけられた。努はきみ子へ絕緣の手紙を書くと同時に、禮子へ愛を打ち開けた手紙を手渡した。やがて二人は婚約した。〔第二編〕兄の家庭の事情を小說に書いたため、下宿しなければならなくなつた。そして禮子との交涉は愈々深くなると共に、禮子が或る男から辱しめられた事を知つた。彼はすつかり打ちのめされたやうに思つたが、禮子への愛情は、却つて前より深まるのであつた。〔第三編〕禮子を辱しめた惡魔への復讐にのみ專念した努は、自分がきみ子にした仕打などを思ひ合せて、いろ〳〵懊惱するが、虐げられた禮子を思ふと、やはり復讐を誓ふのだつた。一方早く結婚して禮子を病院の仕事から解放したいと思つたが、禮子は義務年限の濟むまではといつて肯かなかつた。〔第四編〕努は友人の土屋夫婦の近所に家を借りて代々木に移つた。土屋の細君やその友達の女までが誘惑の手をのべて來た。努は反省と苦惱とのうちに日を過ごした。その上森川町の兄の家では兄が發狂する。さうした暗澹たる中にあつて、救ひの手はただ禮子から來た。偶々大井の友人の留守を預かることになつて彼は暫く代々木を離れた。〔第五編〕大井に移つてから、ふとした機會で、神に就いて考へるやうになつた。そのうち友人が歸つて來て又代々木へ戻つた。彼は禮子が心臟を惡くしてゐることを知つて、愈々彼女を病院から解放する必要を感じ、金の調達に鄕里へ立つた。〔第六編〕歸京後努は暫く山寺の禪堂の一室で孤獨と寂寥と思索の生活を送つた。そして禮子の不幸が彼の愛を深くし、彼を淨めたことに想到して不思議な神の攝理を感じた。彼は禮子に宛てて、神が人間のためにあるのではなくて人間が神のためにあるので、人間の苦しみが激しければ激しい程、それが神の意志に添ふ所以だといふ事、そして受苦の聖なる鬪士はすべて受難者で、キリストのみが受難者でないといふことなどを書いた。彼は禮子との結婚を兄に相談したが兄は賛成しなかつた。〔第七編〕努は再び代々木に家を持つた。禮子は二週間の休暇をとつて病院から出て來たが、結婚の話は思ふやうに進まず、禮子は一時叔父の家へ引取られた。彼は再び兄に賴むべく鄕里に向つたが、途中で兄から電話を受け、必要な金額の半分だけを都合して貰へることになり、あとの半分の目あてもついて、禮子を叔父の家から迎へることが出來た。（エピローグ）彼はかうして結ばれた結婚生活のうちに、靜かに自分の行くべき道に精進すべく努力を續けた。

【批評】長篇作家としての彼の代表作で、自己の體驗を直叙した熱烈な戀愛物語である。一人の女性を愛する事によつて主人公が漸次に醇化されて行つて、その愛の成就安定と同時に主人公の踏むべき道も亦確立されるやうになつたことを書かうとしたものだと云へる。作品全體の方向が健全で、努力と熱意とひた向きな追求とに飽くまでも眞摯な作者の面貌が感じられる。唯この力一杯の眞摯さ、健全さが、發表當時一般讀書界をしてこの作を高く評價させたのであらう。なほ作品全體の段取りはかなり巧に排列されてゐるが、三篇以下に於て作者はただ語るに急で殆ど描く事をしてゐないのは根本的な缺陷である。（片岡）

**執筆**（しゆひつ）　連歌・俳諧

【解說】執筆は、連歌・俳諧の會席（別項）に於て、連衆の出す句を懷紙に記しつけ、連歌なり俳諧なりの故實に通じてゐて、指合を指摘し、一座をして滯りなからしめるやうに勤める役をいふ。着座の場合は、文臺の前にて、奧の上座を後ろにし、左右に居並ぶ連衆に對して坐するのが普通であるが、親王・攝家・門跡などの出座の時は、座の中ほどにあつて上座に對つてその勤をなすのである。〔執筆次第〕連歌道の確立と共に、執筆はその動作・言語は勿論、その作法が細かく規定された。「用心抄」によると、着座の事から始め、硯の蓋を取つて仰向けて置く事、硯に水を指す事、墨の摺り樣、筆に墨を含ませて置く事、紙を折つて文臺の上に置く事、發句（ほつく）賦物（ふもの）の定まつた時受けて書く樣、遲參の人に讀み聞かせる事、讀む上の息のつぎ樣、指合を繰る事、行詰りを生じた時自ら遣句などを作る事、終つて後水引にて綴ぢる事、作名と句數とを書き添へ、年號月日を入れる事などまで一々規定された。「無言抄」（別項）にも、着座・衣紋・言葉・手跡・指合の繰り樣、座中への時宜等の大切なことを述べた後、十餘の必要な條項を掲げてある。一、衆人愛敬をもととすべし。二、親疎好惡を論ぜず平等の心に任すべし。三、その席に爭論なきやうに取扱ふべし。四、指合を考へ越度なきやうにすべし。五、雪月花のありどころを心懸くべし。六、宗匠・貴人等の異見に從ふべし。七、請取・披露・ほど・調子、座敷の相應たるべし。八、懷紙面・手跡等たしなむべし。九、五常・三綱を心にかけ殷懃を專とすべし。十、法度・行儀、終日みだすべからず。この條々能々心得べし云々。「連歌執筆次第」には巨細な點についての作法の注意が記されてゐる。かくて連歌道に於ける執筆の作法は、大體俳道にも繼承されたが、嚴重さを減ずるに至つた。その作法は季吟の「增山の井」や、鷲水の「寄垣諸抄大成」や、支考の「俳諧十論」や、降つて樓川の「俳諧獨稽古」や、その他種々のものに見えるが、大體の骨子は變らぬけれども、時代を降るに從つて、會席の式も嚴重さを減じ、時には紊りがはしいことがある程にもなつたので、自然執筆の作法も同樣であつた。（福井・志田）

**手法**（しゆはふ）　藝術論

〔佛〕Manier（マニエー）【解說】技法ともいふ。技術の方式を云ふ。創作の具體的表現過程に於ては、創作家の個人的動因により、又技術の習得によつて、創作の結果には自ら個人的特色が現はれる。この特色ある表現と具體的結果から見れば、技術上の習癖が覗はれる。これをマニールといふ。手法は個人的樣式（樣式參照）完成の道である。この意味で技法なき藝術はない。併しそれ自身は美的統一を意味しない。故に個人的手法の發現は往々安易な表現、無內容の表現となり、藝術的遊戲に陷る。（マンネリズム參照）（村田）

**入木道**（じゆぼくだう）　「書道」を見よ。

**趣味**（しゆみ）　雜誌

【刊行】明治三十九年六月彩雲閣。途中屢々休刊したが前後十年餘り繼續。【解說】文學を中心とした雜誌であるが、趣味界の各方面に亙つてゐた。編輯者は水谷不倒・東儀鐵笛・水口薇陽の三人。西本波太及び土肥春曙は客員となつてゐたが、後には西本自ら編輯及び經營の衝に當つた。眞に見るべき內容は第五年目末の五十號前後まで

であつた。創刊前後から恰も自然主義勃興期に當つてゐたので、秋聲・花袋・白鳥その他自然派の作品を盛んに揭げ、一方海外の名作紹介に努めて、二葉亭四迷・島村抱月等の飜譯を載する等、頗る新味ある文學雜誌として一時大に重んぜられた。〔齋藤(昌)〕

**修羅物**　「能樂」を見よ。

**朱鱗洞**　俳人　【姓名】野村守隣　【別號】初め柏葉、後、朱鱗洞、更に鱗を鱗に改む。【生歿】明治二十六年一月二十六日、松山市小唐人町三丁目に生れ、大正七年十月三十一日歿。享年二十六【法名】本覺院守隣弘照居士【墓所一松山市外地藏院【閲歷】十三歲の時母を喪ひ、父と共に同市內東雲町に住み、職は溫泉郡役所稅務係であつた。俳句は新傾向運動の時精進し、「層雲」別項)の創刊と共にこれに參じた。十六夜吟社を率ゐて松山に於ける俳壇の新機運を作り、同地の海南新聞の選者として同志の指導に當つた。大正三年頃までの作を前期とすべく、新傾向初期の佶屈な調子を擺脫してゐないが、後期に屬するものは平淡な動律を以て澄んでゐる。短命であつたに拘らず、清新で老成して居り、時代の尖端を歩みながら、圓熟さに於て不朽の感味を持つ作が少くはなく、その肉體の神經質が神經的な鋭敏さを以て、作品に顯はれてゐる。「酒をたうべつ涙をふきし父の顏」「甕の水にしばらくの月寄れり」の如きその一例である。【著作】句集「禮讃」が遺稿として出版されてゐる。〔荻原〕

**順庵**　儒者　【姓名】木下貞幹。字は直夫。通稱平之允。私諡して恭靖といふ。【別號】錦里【生歿】元和七年六月四日京師に生れ、元祿十一年(一三五八)十一月二十三日歿す。享年七十八【閲歷】松永尺五の門に入つて性理の學を修め、京都の東山に塾を置き、教授すること二十餘年、名聲大に振つた。後、加賀侯に仕へ、侯に從つて江戸に來り、天和二年五代將軍綱吉の召に應じてその侍講となる。順庵は學識辭藻一世に高く、その門下からは、新井白石・室鳩巢・雨森芳洲・榊原篁洲・祇園南海・三宅觀瀾(各別項)等の名士が輩出した。明治四十二年九月正四位を贈られた。【著作】錦里先生文集十九卷【批評】順庵は經學・文章並び秀で、文は初め韓退之の文を愛し、後、王陽明の文を好んだ。荻生徂徠、その詩を評して、「錦里先生出でて扶桑の詩皆唐なり」といひ、服部南郭は「錦里先生は實に文運の嚆矢なり。其の詩甚しくは巧ならずと雖も唐を首唱す」といつた。〔佐久〕

木下順庵

**俊惠**　歌人(中古六歌仙の一)【姓源【別號】歌林苑【別稱】大進公・大公【生歿】未詳【閲歷】俊賴の子。東大寺の僧であつたが、僧侶としての傳記は詳かでない。歌人としては永曆元年の清輔朝臣家歌合を初めとし、仁安・嘉應・承安・安元年間を經て治承三年の右大臣家歌合に至るまで多くの歌合の作者となつてゐるが、判者となつてゐることはない。家を歌林苑と名づけて月毎に和歌の會を催し、隆信・定長は俊惠の家にて十首づつ十座に百首を讀んで競つたといふ(無名抄・續古今集)。家名に因んだ「歌苑抄」、並に「詞撰合」を撰し(無名抄等)、さる高貴の仰せに依つて自家集を撰して上つた。長明は俊惠と師弟の契を結んで敎を受け、その著「無名抄」(別項)には、俊惠の談話又は意見が散見される。當時の代表的な歌人のすべてと交際があり、人々からその歌才を推稱せられてゐる。【著作】家集「林葉集」(別項)○勅撰集に入る歌は詞花集一首、千載集二十二首、新古今集十三首、新勅撰集以下十三代集に亙つて凡そ四十八首、合計凡そ八十四首。私撰集に入るものは後葉集一首、續詞花集四首、今撰集三首、月詣集二十五首、中古六歌仙五十九首○詞撰合(和歌色葉集、俊惠大公とあり)○歌苑抄(無名抄、八雲御抄卷一の私記、和歌色葉集等にその名が見える。中古六歌仙には歌苑抄と肩書したものが俊惠六首、清輔十六首、基俊三首、俊惠十四首、登蓮五首、堀河局無、合計四十四首見える。これによつて自他の歌集にて、歌林苑の撰した集の意であると想像される)。【歌論】著書はないが、「無名抄」に依つて大體の意見を伺ふことができる。彼は先づ作歌の心掛けとして、何時も初心のやうな心持で歌を案じ自己の意見を立てないで他人の批評を傾聽すべきことを說いてゐる。蓋し彼は慢心に陷り偏見に執しては進歩しないと戒めたものであらう。次に彼は印象批評の上から歌の優劣を論じ、普通によい歌は型紋の如く、眞によい歌は浮紋の如くであるといひ、「ほの〴〵と明石の浦の」や「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」の如きは眞によい歌にて、餘情が內に籠り、けしきが空に浮ぶと評してゐる。蓋し內在律が躍動してゐて、表現の效果の大きい歌をさしたのであらう。また匡房の歌「白雲と見ゆるにしるしみ吉野の吉野の山の花盛かも」を擧げて激賞してゐる。蓋し彼は區々たる主觀の强調や客觀の描寫を通り越して、眞の藝術が存在し、眞の藝術は無味無色であり、そして唯一絕對の表現が決定されてゐると考へるのであらう。最後に彼は理想的な歌として「思ひかね妹がり行けば冬の夜の河風さむみ千鳥なくなり」(拾遺集卷四、貫之)を擧げて、偉大なる感動を與へる歌としてゐる。而して彼は作家としての創作心理を說明して、「自らよりくる事を安らかにいへるが秀歌にては侍るなり」と述べてゐる。同樣の意見は、定家の「毎月抄」にも反映してゐる。「後鳥羽院御口傳」にも、俊惠の說を擧げて居られる。以上俊惠の意見は作家の立場を縱橫に說明してゐる點に卓越した體驗を示してをり、和歌の本質を表現の上に置き和歌の成立を極めて自然な自然發生と考へてゐる點に、清輔・俊成よりも、遙かに素樸な和歌觀を示してゐる。清輔・顯昭の態度には、ともすれば表現の合理性を求めることに急にして、歌としての感興を沒却するやうな傾向があり、俊成には歌を餘り內面的に深めようとした人生派的な重苦しさが見えるが、俊惠は歌を學問からも哲學からも分離して、和歌を感興の發動による姿の藝術と考へたやうである。【歌風】彼の歌は調子の上には少しの渥滯がない。寫生的な態度の見えるのは、その所論に照して興味が多いが、寫生に徹するといふほどではなく、寫生と觀念と幻想との三つが、混然として併存し、未だ統一した世界を築いてゐない。俊惠の讃歎した賴政は、一定の型を見出し、同一の型の內に豐富にして變化のある內容を盛

つてゐるに對して、俊惠は一つの型を見出すことが出來なかつたのである。

【參考】無名抄 長明 ○大日本史二百二十一○百人一首一夕話 ○日本歌學史 佐佐木信綱○國文學研究史 野村八良 〔酉下〕

**春蘭** しゅんらん 「兄弟物の謠曲」を見よ。

**俊惠法師集** しゅんけいほうししゅう 「林葉和歌集」を見よ。

**春夏秋冬** しゅんかしゅうとう 句集 四册 【編者】正岡子規・河東碧梧桐・高濱虛子【刊行】明治三十四年—三十六年【內容】明治時代に於ける正岡子規一門の作句集として第一期を劃すべき選集である。年代を以てすれば「新俳句」(別項)に次ぐものであるが、「新俳句」は「刊行に際する今已に其幾何か幼稚なるを感ず」と子規も言つてゐる位であるから、この書を以て先づ子規一派の代表的な選集と見なして宜しい。材料は新聞「日本」、及び雜誌「ホトトギス」の俳句欄で、その明治三十一年より約四年間に發表せられたものの中から、春の部は、子規自ら選粹をなし、夏の部以後は碧梧桐・虛子の刪存に成つたものである。 〔荻原〕

魚市に魚の少き餘寒かな　子規
鳥籠に春の夕日の殘りけり　梧堂
我松に月澄み昇る蚊遣かな　四方太
江の北に雲無き日なり鳥踊る　青々

**俊寛** しゅんかん 「平家物の謠曲」を見よ。

**瞬間藝術** しゅんかんげいじゅつ 〔獨〕Augenblicks-kunst 〔英〕Momentary art 【解說】一時的な藝術と云ふ意味。ヴントは、藝術の民族心理學的研究に於て、藝術の心理的動機の考察から藝術發展の心理的段階を、瞬間藝術を最初とし、記念(記憶)藝術・裝飾藝術・模倣藝術、最後に理想(觀念)藝術に達すると說明した。瞬間藝術は多くの勞力を要しない瞬間的な操作によつて作られるもので、例へば砂上に描かれる圖樣の如きもの。從つて作物として永續しない。即ち製作過程も作物そのものも瞬間的な點に於て特徵がある。而して瞬間藝術製作の心的動機は、(一)心覺えのため又は意志傳達のため、(二)單に遊戲的な心持から作られる。以上のうち(一)の實用的な動機を初源的と考へてゐる。(藝術の起原參照)

【參考】Wundt *Die Kunst.* 〔村田〕

**俊寛僧都島物語** しゅんかんそうずしまものがたり 「平家女護島」を見よ。

**俊寛僧都島物語** しゅんかんそうずしまものがたり 「平家女護島」を見よ。

**俊寛僧都島物語** しゅんかんそうずしまものがたり 讀本 八卷【作者】曲亭馬琴【挿畫】一柳齋豐廣【刊行】文化五年【諸本】文化五年文溪堂版を底本として、東京同益出版社版(明治十五年)があり、又曲亭馬琴翁叢書(銀花堂)・馬琴傑作集(帝國文庫)・文藝叢書(博文館)・馬琴佳作集・曲亭馬琴集(近代日本文學大系)等所收。【題材】作者は、引用書目十五部を揭げてゐるが、「平家物語」「源平盛衰記」(各別項)等の俊寛の說話に、異本「義經記」の陰陽師鬼一法眼の說話を結びつけて物語の骨子とし、「十二段草子」(別項)、文耕堂・長谷川千四合作「鬼一法眼三略卷」(別項)、さては支那小說「剪燈新話」中の金鳳釵記等を脫化して脚色してゐる。

【梗概】平清盛の勢盛んであつた頃、新亞相成親は近衞大將を望んで得ず、法勝寺の僧俊寛・多田行綱等と平家討滅を謀つた。この時俊寛の臣龜王は軍用金の償發に故鄕越前に赴き、幼馴染の渡海の色に迷つて歸るを忘れた。爰に鞍馬山を出て奧州に下らうとした牛若丸は清盛の遊山の行列に逢つて憤激し、折から父の郎黨鎌田正親來り、清盛を殺さうと巨石を投じたが果さず、討取らるゝに會し、難を避けて偶々俊寛の山莊に到り、その陰謀を看破する。かくて俊寛は、その明敏なるに感じて同志にしようとしたが、却つてその非なるを說かれ、娘鶴の前との婚約を請ひ、牛若はやがて奧州に發足する。然るに成親等の陰謀は、行綱の裏切に依つて露はれ、俊寛は六波羅に捕はれたので、龜王の弟蟻王は、妻安良子と共に奧方松の前、姫君鶴の前、若君壽德丸を奉じて妻の父案山四郎を賴つた。こゝに於て成親は殺され、その子成經・平康賴・俊寛等は硫黃島へ、行綱は安藝へ流罪と決した。蟻王は潛かに俊寛の出帆を見送らうとしたが果さず、却つて急を聞いて上洛してゐた龜王は、難波で主に會し、奧方等に仕へようとして蟻王に拒まれ、已むなく越前に戻つて渡海と共に死を決し、水江なる父三郎を訪うたが、父は二人を結婚せしめてその不忠不義を誡め、自ら子の罪を負うて切腹した。その後清盛は高倉院の中宮の御懷姙で大赦を行ひ、鬼界島の流人を召還したが、俊寛のみは除外した上、兵を以て松の前を奪はうとした。これがため松の前は自害し、鶴の前・壽德丸は蟻王夫婦と追手を遁れ、蟻王・壽德丸は鬼界島へ、鶴の前・安良子は越前へ行かうとしたが、壽德丸が惡者に浚はれたので、蟻王は跡を追ひ、安良子等は海賊船と知らずしてそれに避難し、遂に姫は海に投じ、安良子は賊に斬られた。一方蟻王は壽德丸を救ひ、海路九州に向ふ時、綾の片袖を拾つて鶴の前の死を知り、やがて硫黃島に渡つたが、獨て都から謫されてゐた島人は、都人と見て壽德丸を襲つた。蟻王身代りとなつて防ぎ、壽德丸は一人で父を探し、偶々落魄憔悴した人に會つて父を尋ねた。その人は俊寛であるが、わざと名告らず、既に歿したと伴はるが、壽德丸は何となくこの人が懷かしまれ、その夜は彼の苫屋に宿つた。そこで俊寛は、因果の理に託して身の上を語り、我が子の寢靜まるを待ち、密かに辭世を殘して入水した。翌朝許されて此處に來つた蟻王は、辭世に依つて事實を知り、壽德丸と共に隈なく島を探ねたが、やがて空しく越前に歸つた。翌年源賴政、平家討伐の驛兵に、蟻王等は上洛したが間に合はず、再び案山四郎に賴るが、四郎の密告に依つて六波羅の捕手が向けられ、牛若丸の助けもかひなく、壽德丸は荒法師淇海に攫はれた。この頃牛若丸は、大悲山の麓に住む軍學者鬼一法眼の娘舞鶴に思ひを寄せ、そこに忍んで法眼の祕書を見ようとし、姫に導かれて密室に赴くと、其處には法眼と壽德丸がゐた。乃ち兵書に就いて問答の結果、法眼は牛若に祕書傳授を條件として娘との結婚を求めるので、諾して祕書を受けたが、その僞書なるを知つて破棄し、怒つて斬りかゝる法眼を惱ましてゐると、折しも蟻王は淇海が法眼の弟子なるを聞き、忍び込んで格鬪し、共に拔穴に落ちて轉げ來るを、牛若は淇海を斬つてしまふ。淇海は即ち龜王であつた。又舞鶴は鶴の前の靈、法眼は俊寛で、硫黃島で入水した後、龜王夫婦の漁船に救はれて上洛の途中、鶴の前に邂逅したのであつたが、姫は安良子と共に嘗て龜王等のために死んでゐたのである。かくて渡海も出て來て自刄し、折柄來つた蟻王等追捕の兵に、龜王夫婦の首級を、蟻王・鶴の前のそれに代へて事なきを得た。やがて牛若は輕朝を助けて平家を滅し、俊寛等は肥前に遁世してゐたが、後、義經の悲運を悼んで南都に歿した。

【構想】その理想から大義名分に立つて、史實



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com